



TITLE:

<批評・紹介>支那文學藝術考 青
木正兒著

AUTHOR(S):

入矢, 義高

CITATION:

入矢, 義高. <批評・紹介>支那文學藝術考 青木正兒著. 東洋史研究
1943, 8(2): 124-126

ISSUE DATE:

1943-06-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145787>

RIGHT:

を指摘するのでは實は未だ充分ではなくて、その比較を通じて先秦の經濟思想の不明な部分をよりよく探求、發掘、精練して初めて、その比較が充分の意義を發揮するのではないかといふことである。このことは著者の如き士にして、わづかによく成し得るところであることを思ひ、望望の念切なるを覺える。

以上は曾つて讀過の際に抱いた感想の一端である。この他なほ自ら疑問として教へをうけたいこともあるが、いま編輯子の督促急に、かつ身邊の雜事に追はれて、再讀の暇なきまゝ、燕雜な讀後感をつらねて責をふさぐ。もつとも時間的に餘裕を與へられたとしても、本書の内容を批評する如きは實は筆者のよくする所ではない。著者が「みるところは同じでも、みる人が變れば、思ふところは自づから異なるなきを得まい」と言はれるところを借りて妄評を敢てなすの辯に代へたい。(大島利一)

支那文學藝術考

青木正 兄著

昭和十七年八月 弘文堂書房發行

A5判四七四頁圖版十五 定價五圓五拾錢

青木先生は近頃矢繼ぎ早に本を出される。一昨年は隨筆集『江南春』を、昨年はこの論纂を、また近く『支那文學思想史』を出版されると承つてゐる。健康あまり勝れさせられぬ先生にして、かく一年に一本といふ工合に續々と著書を出される旺んな御精力には、我々たゞ嬉しくもまた驚倒するばかりである。失禮なことを言ふやうで恐縮であるが、先生の御氣質(勿論筆

者が自ら想像するものにすぎぬ)から推して、本を出すといふやうなことは餘り好まれぬかのやうに思つてゐた筆者は、先生のこの盛んな名山事業を見るに及んで、實は全く意外な感に打たれたのであつた。筆者の獨り合點はどうも間違ひだつたらしい。讀者は先生のその心意氣を此の書の序文から窺ひ知ることができよう。先生の御本領は、筆者如きが驚かうと驚くまいと頓著なく、愈々琢きがかゝり、愈々枯淡さを加へて、我々の飢渴を癒やして頂けるであらうと、近來これほど心樂しい期待はないのである。

さてこの名著を、淺學しかも疏懶な筆者如きが到底批評するなんどの資格のないことは、誰よりも先づ自分が知つてをり、では紹介といふところで逃げようにも、今さら紹介するまでもなく、本誌を讀む程の人ならば、既に御承知済みのことであらう。たゞ筆者が此の書に限らず先生の著書を一倍愛讀してゐることが事實である以上、どういふ點を「愛」讀するかに就いてなど何か一言へないでもあるまいと思ひ、自分ひとりの讀後感的なものを書き連ねる次第、獨り決めなところや、とんだ感違ひが數々あらうが、前もつて御赦しをお願いして置きたい。

先生の文章を讀むことは楽しい。勿論先生の精妙な論證や細密な考證からも、我々の啓發されるものは非常に多いが、と共に筆者の強く心奪かれるものは、土岐善麿氏の評語を借れば、「豊潤」なその文章である。嘗て『江南春』が世に出た時、そ

の中の春の江南紀行五篇を取つて天下第一の文章と評した人があつた。これらは大正十一年の作であるが、本書に收められた諸篇すべて學術的なものでありながら、その行文の味ひはやはり前者と相通するものがあり、なるほど「豐潤」といふ言葉で現はせさうである。それは「揚州に在りし日の孔尚任」の如き細かな考證に於ても然りである。これは驚くべきことと言はねばならぬ。いかに參差錯綜した事柄の考證でも、讀者をして興味津々として讀み進ませずに措かぬのは、一つには此の豐潤にして雅勁、かつ枯淡な味ひを持つ文章のためと言へよう。何と形容すべきか適當な言葉を知らぬが、譬ふればふつくりと兩手で鰻を抱へこむやうな先生の筆致は何と言つても大きな魅力の一つであらう。このことはまた概説的な文章に於てもさうである。本書には「國文學と支那文學」「支那人の自然觀」等の概説的な論文も收められてをり、その中には澤山な文獻が次々と引かれ、かなり詰まつた歴史的叙述であるが、概説書に有り勝ちなあの干乾びた素つ氣なさは微塵も無い。まさに達人の文章と言ふべきであらう。先生の舊著『支那文學概説』『元人雜劇序説』を讀んで筆者が先づ驚嘆させられたのもこの點にあつた。

勿論その名作たる所以は文章だけに在るのではなく、多くの資料に對する鮮かな處理、精到な論證など、先生獨自の勝れた手法に依ることも固より大きい。一々の例を擧げることはいないが、これら概説的な諸篇に於て、何でもないやうな叙述の中から先生の犀利な批評眼の片鱗が窺はれることさへ多く、殊に筆

力餘つてやゝ岐路へ論を進められたところなど、愈々その光彩陸離たるを覺えるのである。世の所謂概説書なるものに、著者の肉體を感ぜしめる底のものは殆んど無い。先生の書は然らず。そこには先生の人格が浸潤せしめられ、それは或は讀者の面を搏つ程に刺き出しに露はれ、或は行間にそれとなく掩映してゐるのである。

前に擧げた「支那人の自然觀」(昭和十年發表)は、この種のものとしては他に類するもの無く、名著たること學界既に定説があるが、これが概説的なものであるに對して、精密な考證である「劉知遠諸宮調考」も、昭和七年の作ではあるが、新出の文獻を縦横に分析解明し、此の方面の新しい分野に始めて開拓の鉄を入れた劃期的な名篇である點に於て、その持つ歴史的な意味は大きい。そこには他の追隨を許さぬ先生獨自の考證手法が餘す所なく發揮されてゐる。その非常に困難な考證を、先生は根強くしかも慎重に、そして極めて樂しさうに進めて行かれる。この苦しい作業をかくも樂し氣に運んでゆかれるのを見て、先生は考證も相當お好きだなと感じたことである。先年大學で近世蘇州の藝苑に就いての特殊講義を聴講した時も、錯雜した數多くの關係資料を蒐集し處理せられつゝ論を進められるのが如何にも心樂しさうで、私に羨望の情に堪へなかつたのであつた。本書にはほかにも考證が數篇收められてをり、どれも讀者をして些かも煩瑣を感ぜしめず、飽かしめることなく終始興味深く讀了せしめる。特に繪畫に關するものは、鮮明な

寫眞版が數多く挿入されてゐるので、文を読み且つは畫を眺めつゝ、考へつゝ味ひつゝ、時の經つものも忘れる程である。讀書の愉しみとか、半日の清興とかは、まことにこれと言ふものであらうか。『支那文學概説』の序に、先生は「文學は須らく味ふべきである、陶醉すべきである。然し食へども其の味ひを知らず、酔へば則ち足ると云ふやうな牛飲馬食の徒であつてはならぬ。一寸した鹽加減、微妙な風味にも靈感する味覺を養はねばならぬ」と述べてゐられる。樂しみつゝ考へるといふこと、それは筆者に取つて一つの理想でもある。それはまた研究の中に喜びを見出すといふことは、別なことのやうな氣もする。畢竟この「味覺」を養ひ得てこそ始めて入ることを許される境地であらうか。

(入矢義高)

近世支那經濟史研究

小 竹 文 夫 著

昭和十七年十月 弘文堂書房發行

A5判二九三頁 定價 參圓貳拾錢

輓近經濟學に於ける民族的特殊性といふことが頻りに喧傳せられてゐる。嘗てリストが、普遍的現象として論ぜられた經濟現象に民族的特殊性を強調して、イギリスの正統學派に對し獨逸經濟學を成立せしめたと同様、現時此の變轉期に際會せる我が國に於て、日本經濟學の成立、日本經濟法則の樹立が特に唱道せられてゐる。これは從來の西洋經濟學が、その思想的根柢に於て、日本人の有する人生觀と根本的に異なるが爲めである

と主張せられる土方成美博士の所論（日本經濟學への出發『日本評論』昭和十三年五月號）に従ふならば、日本人とまた正反對な程に人生觀を異にする支那人の營む經濟生活、それを研究の對象とする支那經濟學は、前記の民族的特殊性をより強度に具有するものであつて、支那經濟學の成立は更に容易であると言ひ得る。東亞新秩序建設の當事者たる我が國にとつて、此の大事業遂行の好伴侶なる友邦の實體を把握することは緊急の要務であるが、東亞新秩序建設は日本的道義の要請に基くとしながら、日滿支互助連環の關係を中心とする共榮圈思想を説くとき、經濟部門が如何に優越性を有するか知られるのであつて、此處に此の特殊なる支那經濟學の研究が必要とせられる所以が存するのである。

上海東亞同文書院大學教授小竹文夫氏の勞作にかゝる本書は、此の意味に於て、支那經濟理解に一助となる良書である。

著者は言ふ迄もなく、學生時代より半生を彼地に送り、朝夕その特有なる風物に接するの外、必要に應じて各地に調査旅行を試み、文獻による理論的検討と實情調査とを兼ね併せ、正に鬼に金棒の感あり、他人の追隨し得ない強みを有してゐられる。

經濟史の研究は理論的に行はるべきものでなくして、事實に基いて考察すべきであるとすれば、著者の如きは最もよく此の鐵則を踏襲したものといふべきであつて、其の所論の妥當性は、正に此の點に在るのである。

本書は『經濟史上における近世支那社會の性質』『明清時代に